

(有)山国さきがけセンター 代表取締役

大栢 隆さん

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

「山国の皆さんに支えてもらい14年が過ぎた。伝統食の納豆を使った加工品の販売や農業経営で地域活性化への役割を果たしていきたい」と話すのは、京都市右京区京北・山国地区の農業生産法人「(有)山国さきがけセンター」代表取締役の大栢隆さん(76)だ。

同社は旧JA京北町の合併を機に、同地区の農家組合や有志らが出資して2001年に発足させ、支店店舗や加工施設を引き継いだ。社名は、同地区のシンボルである時代祭の先頭を行く山国隊の陣笠に付されている維新勤王隊の心意気「魁(さきがけ)」の文字を引用して名付けた。

さらに08年には、農業の後継者

不足と耕作放棄地を解消するため、農業生産法人となった。その翌年に大栢さんは代表取締役に就任し、「地域ぐるみで立ち上げたのが当社の強みだ。顔が見える関係で信頼関係が築かれているから、安心して農地を預けてもらえ」と強調する。

加工品の納豆もちやみその原材料は地元産にこだわる。設立当時は1・7畝だった経営面積を14畝まで拡大し、加工用米や大豆などを生産する。13年には、念願の加

工施設や店舗を有した6次産業化の拠点施設「山国 水・土・里の館(みどりのやかた)」をオープンさせた。同社が施設の管理・運営を行い、加工品の生産・販売をはじめ、特産物を使った新商品の開発にも力を注ぐ。こうした安定した実績が評価され、小学校の給食用にみそを納品する他、JA京都の全地区から正月用の鏡餅などの注文を受けている。

しかし、「これで満足してはいけな」と大栢さんは次のステップを踏み出す。省力化を図るため、同JAの指導で今年



▶ 地産原材料で加工したみそや納豆もちを手にする大栢さん

試験的に取り入れた水稻の鉄コーティング直播(ちよくは)を、来年は本格的に導入する計画だ。また、大豆の増産を目指すして圃場(ほじょう)の給排水の制御システム「フォアス」

の導入や、農地中間管理事業を活用した農地集積にも取り組み、将来的にはハウスの導入で年間を通じた農業ができる体制を築きたいとしている。

大栢さんは「当社の事業は地域の皆さんの理解がないと継続できない。そのため、昨年10月から情報誌『魁の心意気』を発行して同社の取り組みを紹介し、情報の共有化を図っている。山国隊と同じく、ふるさとを愛する誇りを胸に、山国地区が一体となって地域の活性化に取り組めるよう頑張りたい」と力を込める。

.....

■法人所在地 京都市右京区京北塔町宮ノ前23、(電) 075(853) 0572。

■法人概要 設立2008年4月。取締役11人、監査役2人。正社員2人、パートタイマー15人。耕作面積14畝(加工用米、酒造好適米など水稻7・2畝。大豆6・3畝。黒大豆、そば、野菜など80畝)。トラクター、大豆播種機、コンバイン、大豆・米乾燥機、動力噴霧機各1台。

商品や営業時間はホームページを参照 <http://sakigake.net/>

ふるさとへの愛胸に